

氏名（本籍）	大友 邦子		
学位の種類	博士（感性科学）		
学位記番号	博甲第	7393	号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	パターンデザインの印象評価における線質と図案の相互影響		
主査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	五十嵐浩也
副査	筑波大学教授	理学博士	久野節二
副査	筑波大学准教授		内山俊朗
副査	拓殖大学教授	博士（感性科学）	岡崎章

論文の内容の要旨

(目的)

インテリアや服飾に用いられる布地上のパターン(図案)は、線によって主に構成されている。本研究は線の性質(以下線質)がパターンの印象評価に及ぼす影響を明らかにすることを主目的としている。

(対象と方法)

本研究で扱う、線、モチーフ(図柄)そしてパターン(図案)は、線によって構成されるモチーフ(図柄)があり、モチーフが繰り返されることによって、パターン(図案)になるという構造となっている。そこで、手で描かれた線(以下手描線)とコンピュータで描かれた線(以下PC線)を比較対象とし、主に手描線の線質を明らかにするために2つの実験を行った。事例研究1;線の構成によって形成されるパターン(図案)において、線質がパターンに及ぼす感性的な影響を探る実験と、事例研究2;パターンの構成要素であり、同じく線によって構成され、ある形態としてのまとまりを有するモチーフ(図柄)の意味性の違いが及ぼす、線質とパターンの間の感性評価実験である。

事例研究1においては、広く世界中で基本的な図柄として用いられているストライプを選定し、線質は手描線とPC線を選択した。また、被験者として日本、ドイツ、フランス、フィンランドのデザイン・美術教育を受けたことがある学生、社会人を選定した。基本的なストライプを用いた場合、線質がパターンにあたえる影響の要因として国籍、環境があるのかを確認するためであった。実験は紙の上に印刷された試料に対し、感性用語の形容詞対に対し強度を記載するSD法を用いた。言語は、日本人に対しては日本語、他の国籍の被験者に対しては英語を用いた。分析は分散分析、並びに主成分分析をおこなった。

事例研究2においては、意味を有するモチーフ(図柄)として花柄を選択し、意味を有しない抽象的なモチーフ(図柄)として格子柄、水玉柄を選択した。この意味の有無という図柄の違いにおいて、線質がパターン

に及ぼす感性的影響を調べた。被験者は、図柄が意味性を持つということ自体が、国籍、環境の影響を受けてしまうことが明白なため、日本人のみとした。被験者の属性は事例研究1と同じである。実験方法も事例研究1と同じであったが、SD法に用いる形容詞対に用途、地域性に関する項目を追加した。分析も事例研究1と同じく分散分析、主成分分析を主としている。

(結果)

事例研究1の結果、分析により、線質及び線幅は高級感と自信ありげな印象に大きく影響することが示され、「あたたかい」、「自由な」、および「懐古的な」、と言った親しみ感因子は線質を表す因子であることが示唆された。また、ストライプパターンに対する嗜好性は国籍、環境において差があり、「高級感」はドイツ、フランス、「自信にあふれた」は、日本のそれぞれの嗜好性と相関し、線質、線幅の影響を大きく受けることが示唆された。事例研究2からは、線質が特定の意味を持たないモチーフについては、パターンの印象を決定する要素であることが明らかとなった。特に手描線のゆらぎの効果は嗜好性に影響し、手描線で描かれる幾何学柄は好まれる傾向がある。一方、意味性を有する花柄に対しては線質の影響が小さく、線質の好ましさはモチーフの形態によって判断される。また、図柄がどのように繰り返されるかということも、線質やモチーフの性質よりは少ないが、パターンの印象に影響していることもわかった。

(考察)

線質は「高級感」、「自信にあふれた」そして「洒落感」といった印象に大きな影響を及ぼし、国籍によって印象評価傾向が異なることが示された。この結果は意味性の無い抽象的なモチーフを用いた場合に顕著であり、その際には、「あたたかい」、「自由な」そして「懐古的な」という親しみ感の印象に影響する。特に手描線にて描かれ、モチーフ(図柄)が抽象的で意味性の無い幾何学柄の場合は、美しさや洗練さに関わらず好ましいと評価される傾向が強い。一方、モチーフが意味性を有した場合はモチーフによって線質が与える影響が異なることがわかった。これらのことから、線質は、パターンデザインにおいて印象形成の要因となっていることが明示され、嗜好性に対しては大きく影響があることが示唆された。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、研究者本人がデザイナーとして布地のパターンデザインを行って来た経験から派生した研究テーマであり、その意味においては実践的な感性科学の研究であると考えられる。本文中にも記載されているが、日本のデザイナーは創出するデザイン数が多く、デザインの品質の問題にさらされている。その中で特に手描線の品質としての価値を感性評価しておくことには意味があると考えられる。また、今回の研究において、手描線を含む線質がパターンに与える影響の端緒が示されていると考えられ、評価できる。

平成27年1月23日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(感性科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。